

友人、先輩、そして後輩、 校友との出会いに縁を感じます

国文学科を卒業後、
勤めながら作品を書き続けた上野さん。
紆余曲折を経て、
94年に小説すばる新人賞を受賞する。
現在では“お仕事小説”分野で
多くの読者から共感を得ている。
彼の人生には、節目ごとに
校友が深く関わっていた。

上野歩さん（昭63・国文）

小説家

うえの あゆむ●1962（昭和37）年、東京都墨田区生まれ。88年、文学部国文学科卒。卒業後、テレビ情報誌の編集、玩具業界誌の記者、環境コンサルタント会社に勤務。94年に『恋人といっしょになるでしょう』でデビュー、同作品で第7回小説すばる新人賞を受賞する。『削り屋』（2015年小学館文庫）、『わたし、型屋の社長になります』（2015年小学館文庫）、『墨田区吾妻町発ブラックホール行き』（2016年小学館）など、“お仕事小説”のジャンルで意欲的に作品を発表する。

新刊発売

『探偵太宰治』

2017年7月15日発売
文芸社文庫NEO（640円＋税）
作家太宰治が様々な事件と関わる青春小説。実際の太宰が送った人生とリンクさせ、そこで起きる難事件を太宰治が解決してゆく。



卒業後「小説を書く」ことを 優先して仕事を選ぶ

子供のころ、小説家になるにはどうすればいいか？ という発想から本をよく読むようになりました。探偵物が多かったですが、基本は乱読でなんでも読みました。大学では文学研究会というサークルに入りました。小説は書いてはいましたが、長いものではなく、それよりもよく友達と酒を飲んでいましたね。

卒業を目前に控え、実は卒論の提出

が3分間遅れ、留年してしまったのです。就職先はテレビ誌の編集に決まっていたため、学籍を残したまま契約社員として勤めることになりました。出版社はとても忙しい職場で、帰りはいつも深夜でタクシーでした。小説を書きたいという想いはずっとあったので、そこにいても小説の題材に出逢えない気がして会社を辞めたのです。まあ、堪え性がなかったのだと思います。

その後、浅草の玩具業界誌に勤めました。そこで仕事に深く関わっていくうちに、「これは小説になる！」と直感しました。当時、トレンドドラマ

全盛で、舞台は赤坂、六本木ばかりでしたが、浅草が舞台というのは逆にいけると感じました。思えば“お仕事小説”を手掛ける最初のきっかけだったのかもしれない。

職場で題材を得て、勤めたまま会社のことを書くのはまずいと思って、その会社も退職しました。フリーで原稿を書きたいという想いもあり、退職した後、仕事もせずに小説ばかり書いていたら、生活ができなくなってしまいました（笑）。

当時環境コンサルタントの会社に法学部の先輩が勤めていて、「お前大丈夫か？」と、市町村の広報ビデオのシナリオ、パンフレットの記事づくりの仕事をもたらしたのです。それが縁で、いつの間にか勤めさせてもらっていました。

小説家デビュー、新人賞受賞 しかし迷いが生じる

環境コンサルの会社に勤めながら、会社のワープロを借りて小説を書き続け、『恋人といっしょになるでしょう』でデビューしました。その勤めの間にも生田校舎で臨時の講師をやらせていただくなど、かなり自由にさせてもら



上野さんの作品を題材に、女性浪曲師・木村勝千代さん（平2・国文）が浪曲を創作、高座にかけている。木村さんも文学研究会出身。口演中、作者の上野さんがホロリとくる場面も。（新宿道楽亭）



製造業を題材にするため、リアルな情報は不可欠。上野さんは自ら取材先を調べ、連絡し、徹底して取材する。（新潟・株式会社ツバメックス／撮影＝今祥雄カメラマン）

っていました。社長の人柄がとても良かったのですが、さすがに甘え過ぎと思ひ、39歳で退職したのです。今度こそ、小説に専念するはずが、その後の10年間は小説を出版することなく過ごしてしまっ

どこの出版社もいつまでも本が売れない作家を相手にはしてくれません。純文学と違って、エンターテインメントの小説は売れ行きが勝負です。出版社も3冊までは様子を見てくれますが、僕は3冊目まであまり結果を出せませんでした。

当時、「小説すばる」にいくつか短編を発表していたので、それを単行本にまとめたら引退しようと考えました。何を書いているかわからないし、もういいかな、という感じだったんです。

そこで文芸社という出版社に持ち込んだところ、当時書きかけだった長編を出すことになりました。それが『愛は午後』という作品なんです。その10年は、エッセイ集を1冊出しただけで小説は出版しなかったんです。

大学時代からの校友の一言で 新たな一歩を踏み出す

本を出版した文芸社で、「空いている時間は原稿を書いているもいいよ」

と言ってもらえたのをいいことに「執筆アドバイザー」という仕事をしていました。自費出版したい人の小説を添削する仕事で、ほぼ10年間会社員のような生活をしていました。

50歳を目前にして「お前さあ、小説書かないとだめだよ」と言ってくれたのが、大学の同期で、経営学部出身の内原くん*でした。もともと彼との出会いは文学研究会でした。彼は卒業後にNCネットワークという会社を起業し現在も社長です。その内原に「今度製造業のドラマ作りしたいと思ってんだよ」と、言われ、その原作として、同社のホームページに掲載したのが『わたし、型屋の社長になります』でした。その後リーマンショックなどで一時掲載はなくなるのですが、景気が盛り返してきた時『削り屋』の連載をホームページで始めさせてもらったんです。彼がいなければもう小説を書くこともなかったのかもしれない。

2年間かけてホームページで連載して完結し、小学館のOBの方の目に留まって、出版の運びとなりました。

取材で得る情報を重視 自身で体験して修得する

小説は、僕自身が取材させてもらい、

校友会130周年への お祝いメッセージ

先日、取材で生田の第三体育寮に伺いました。新宿から小田急線に乗った途端に学生時代がよみがえってきました。生田はだいぶ変わりましたが、ひと山全てが専修大という印象で全体に懐かしい雰囲気が漂っていました。校友のみなさんとの絆をこれからも大切にしていきたいと思ひます。130周年、おめでとうございます。



技術を学んで作品に落とし込んでいきます。僕が一から修行して学んでいったことは主人公を通じて読者に疑似体験になります。リアルな情報を得るために取材は自分でアポをとって、1人で行くようにしています。会って取材すれば絶対プラスになりますから、アポはバンバン取ります。

お仕事小説という大きなジャンル、そのなかの製造業について、これだ！という題材を探して書き続けていきたいと思っています。自分のなかで発想するというより、取材を通して得た題材などで書いていきたいです。

もしこれから小説を書きたいと思ひの方がいれば、書くのではなく、話すように書いてみてください。書こうとすると身構えてしまうので、人に話すように書くのと伝わりやすいですよ。

（談）

上野歩

検索